

陸連時報 三

2019
令和元年

12 月号

題字は平沼亮三(初代陸連会長)の書

目 次

2020年度 主要競技会日程(案).....	198
理事会報告.....	199
ドーハ2019陸上競技選手権大会大会報告(強化委員会).....	201
第218回/第219回国際陸上競技連盟(IAAF)カOUNシル会議及び第52回IAAF総会報告 (会長 横川 浩).....	205
世界選手権視察報告.....	207
陸上競技研究紀要投稿募集について.....	208
令和元年度「体育の日」中央記念行事2019報告(指導者養成委員 櫻田淳也).....	209
第50回ジュニアオリンピック陸上競技大会報告.....	209
大会観戦ガイド.....	210
陸協NEWS.....	212
事務局からのお知らせ.....	214

公告

「陸連時報」は公益財団法人日本陸上競技連盟定款第4条第6号の「機関誌」の性格を有するものですが、毎月「陸上競技マガジン」と一体として発行しています。陸上競技に関する啓発記事のほか、必要に応じて、評議員会、理事会の決定事項、各専門委員会、事務局からの報告、通達も掲載いたします。本時報に掲載した通達は、公式に通達したものと取扱わさせていただきますので、登録競技者は本時報の掲載内容にご注意下さい。また、陸上競技指導者の方は、所属競技者にお知らせ下さるようお願い致します。

公益財団法人日本陸上競技連盟

2020年度 主要競技会日程(案)

※主要競技会日程は、2020年3月の理事会で最終承認されます。

	主催・共催 競技会			主要 競技会			国際 競技会		
	期日	競技会名	場所	期日	競技会名	場所	期日	競技会名	場所
4月	12(日)	104 日本選手権50km競歩	石川	11(土)	★ GP 金栗記念選抜中・長距離	えがお健康スタジアム(熊本)			
	19(日)	22 長野マラソン	長野	19(日)	★ GP 出雲陸上	県立浜山公園(島根)			
				19(日)	★ GPP 兵庫リレーカーニバル	ユニバー記念(兵庫)			
				調整中	★ GPP TOKYO Combined Events	調整中			
			26(日)	★ 10 ぎふ清流ハーフマラソン	岐阜				
			29(水・祝)	★ GPP 織田記念陸上	広域公園(広島)				
5月	5(火・祝)~6(水・祝)	テストイベント(仮名称)	国立競技場(東京)	3(日・祝)	★ GPP 静岡国際陸上	エコパ(静岡)	2(土)~3(日・祝)	29 世界競歩チーム選手権	ミンスク(ベラルーシ)
	10(日)	ゴールデングランプリ	国立競技場(東京)	4(月・祝)	★ GP ゴールデングেমズinのべおか	延岡(宮崎)	14(木)~17(日)	19 アジアジュニア陸上競技選手権	バンコク(タイ)
	16(土)~17(日)	66 全日本中学通信陸上	各地	5(火・祝)	★ GP 水戸招待陸上	Kスタ水戸(茨城)			
				6(水・祝)	★ GP 木南道孝記念	ヤマスタジアム長居(大阪)			
			10(日)	★ 30 仙台国際ハーフマラソン	宮城				
			15(金)~17(日)	★ 68 全日本実業団	ヤマスタジアム長居(大阪) / ヤマフィールド長居(大阪)				
6月	13(土)~14(日)	104 日本選手権混成	長野市営(長野)	6(土)	★ GP Denka Athletics Challenge Cup	デンカビッグスワン(新潟)	調整中	アジアリレー	調整中
	13(土)~14(日)	36 U20日本選手権混成	長野市営(長野)	7(日)	★ GP 布勢スプリント	布勢総合(鳥取)	調整中	日中韓3カ国交流	中国開催予定
	25(木)~28(日)	104 日本選手権	ヤマスタジアム長居(大阪)	調整中	○ '20 日本学生個人	Shonan BMW スタジアム平塚(神奈川)			
				28(日)	35 サロマ湖100kmウルトラマラソン	北海道			
7月				12(日)	GP 南部記念陸上	円山(北海道)	7(火)~12(日)	18 U20世界陸上競技選手権	ナイロビ(ケニア)
				18(土)	60 実業団・学生対抗	Shonan BMW スタジアム平塚(神奈川)	19(日)	アジアハーフマラソン	チェンライ(タイ)
8月	12(水)~16(日)	73 全国高校陸上	エコパ(静岡)	30(日)予定	'20 北海道マラソン	北海道	31(金)~9(日)	32 オリンピック	国立競技場(東京)
	13(木)~15(土)	55 全国定通制高校陸上	駒沢(東京)				23(日)~29(土)	28 日・韓・中ジュニア交流競技会	秋田(日本)
	17(月)~20(木)	47 全国中学陸上	三夏交通(スポーツの杜(三動))						
	22(土)~23(日)	55 全国高専陸上	鴻ノ池(奈良)						
9月	20(日)	36 全国小学生陸上	日産スタジアム(神奈川)	10(木)~13(日)	○ 89 日本学生対校	デンカビッグスワン(新潟)			
10月	9(金)~13(火)	75 国民体育大会	鴨池(鹿児島)	2(金)~4(日)	41 全日本マスターズ	福井県福井(福井)			
	23(金)~25(日)	51 ジュニアオリンピック	日産スタジアム(神奈川)	調整中	○ 32 出雲全日本大学選抜駅伝	島根			
	23(金)~25(日)	36 U20日本選手権	広域公園(広島)	18(日)or25(日)	GP 田島記念陸上	維新百年記念(山口)			
	23(金)~25(日)	14 U18日本選手権	広域公園(広島)	25(日)	59 全日本50km競歩高島	山形			
	調整中	104 日本選手権リレー	北九州市本城(福岡)	25(日)	○ 38 全日本大学女子駅伝	宮城			
			調整中	GP 北九州陸上カーニバル	北九州市本城(福岡)				
11月				1(日)	○ 52 全日本大学駅伝	愛知・三重			
				8(日)	36 東日本女子駅伝	福島			
				15(日)	10 神戸マラソン	兵庫			
				22(日)or29(日)	40 全日本実業団女子駅伝	宮城			
			29(日)	10 大阪マラソン	大阪				
12月	6(日)	74 福岡国際マラソン	福岡	13(日)	'20 長崎陸協競歩	県立総合(長崎)			
	13(日)	6 さいたま国際マラソン	埼玉	13(日)	39 山陽女子ロードレース	岡山			
	20(日)	28 全国中学駅伝	希望が丘(滋賀)	20(日)	51 防府読売マラソン	山口			
	20(日)	71.32 全国高校駅伝	京都	30(水)	○ '20 全日本大学女子選抜駅伝	静岡			
2021年1月	17(日)	39 都道府県対抗女子駅伝	京都	1(金・祝)	69 元旦競歩	東京			
	24(日)	26 都道府県対抗男子駅伝	広島	1(金・祝)	65 全日本実業団対抗駅伝	群馬			
	31(日)	40 大阪国際女子マラソン	大阪	31(日)	'21 大阪ハーフマラソン	大阪			
2月	6(土)~7(日)	'21 日本室内陸上大阪	大阪城ホール(大阪)	7(日)	70 別大マラソン	大分			
	14(日)	6 全国中学生クロスカントリー	希望が丘(滋賀)	7(日)	75 香川丸亀国際ハーフマラソン	香川			
	21(日)	104 日本選手権20km競歩	兵庫	14(日)	32 全日本びわ湖クロスカントリー	希望が丘(滋賀)			
	27(土)	104 日本選手権クロスカントリー	海の中道海浜公園(福岡)	14(日)	49 実業団ハーフマラソン	山口			
	27(土)	36 U20日本選手権クロスカントリー	海の中道海浜公園(福岡)	21(日)	55 青梅マラソン	東京			
	28(日)	76 びわ湖毎日マラソン	滋賀	21(日)	'21 熊本城マラソン	熊本			
				21(日)	'21 京都マラソン	京都			
3月	7(日)	'21 東京マラソン	東京	調整中	○ 24 日本学生ハーフマラソン	東京	21(日)	アジア陸上競技選手権200m競歩	能美(石川)
	14(日)	'21 名古屋ウィメンズマラソン	愛知	21(日)	○ 15 日本学生20km競歩	石川	30(火)	'44 世界クロスカントリー選手権	バグース(オーストラリア)
	21(日)	45 全日本競歩能美	石川	21(日)or28(日)	○ 24 日本学生女子ハーフマラソン	島根			

★=後援競技会、○=協力団体主要競技会

理事会報告

第57回理事会

日時：2019年10月10日（木）

14時00分～16時57分

場所：JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE

14階 岸清一メモリアルルーム

理事総数30名中出席者26名にて、理事会の成立を風間事務局長が報告。横川会長が挨拶を行い、引き続き、議事進行に入る。

【協議事項】

1. 2020年度主要競技会日程

尾縣専務理事より資料に基づき説明があり、2020年度主要競技会日程が承認された。

（本号198頁及び本連盟WEBサイト <https://www.jaaf.or.jp/files/upload/201910/2020calendar.pdf> 参照）

※2020年度主要競技会日程は、2020年3月に開催する本連盟理事会において最終承認されるため、資料は案のみとする。

2. 東京2020オリンピック競技大会選手報奨金

尾縣専務理事より資料に基づき説明があり、原案通り、東京2020オリンピック競技大会選手報奨金が承認された。

【東京2020オリンピック競技大会選手報奨金】

順位	金額
1位	2,000万円
2位	1,000万円
3位	800万円
4位	300万円
5位	200万円
6位	200万円
7位	100万円
8位	100万円

○リレー種目の報奨金は、予選と決勝に出場した全選手を対象として、上記の半額を支給する。

○ドーピング違反等で順位剥奪となった場合、報奨金の全額返納となる。

○10年間の間に順位の変動があった場合、差額を支給する。

3. 南京2020世界室内陸上競技選手権大会

日本代表選手選考要項

麻場強化委員長より資料に基づき説明があり、原案通り、南京2020世界室内陸上競技選手権大会日本代表選手選考要項が承認された。

※国際陸上競技連盟発表のエントリースタンドの確認事項の確認が済み次第、日本代表選考要項を本連盟WEBサイトに掲載する。

（本連盟WEBサイト <https://www.jaaf.or.jp/news/>

[article/11992/](https://www.jaaf.or.jp/news/article/11992/) 参照）

4. 杭州2020アジア室内陸上競技選手権大会

日本代表選手選考要項

麻場強化委員長より資料に基づき説明があり、原案通り、杭州2020アジア室内陸上競技選手権大会日本代表選手選考要項が承認された。

（本連盟WEBサイト <https://www.jaaf.or.jp/news/article/11992/> 参照）

※日本代表選考要項の実施種目は2018年大会の種目となっているため、アジア陸上競技連盟から最終的な案内が届き次第、派遣種目を確定する。

5. 東莞2019アジア選手権マラソン

日本代表選手選考要項

麻場強化委員長より資料に基づき説明があり、東莞2019アジア選手権マラソン日本代表選手選考要項が承認された。

（本連盟WEBサイト <https://www.jaaf.or.jp/news/article/11992/> 参照）

【報告事項】

1. ドーハ2019世界陸上競技選手権大会報告

麻場強化委員長より資料に基づき、2019年9月27日から10月6日までカタール・ドーハにて行われた世界陸上競技選手権大会の結果が報告された。金メダル2、銅メダル1を獲得し、入賞数は5であり、日本は、メダルテーブルで8位、メダル数、入賞数を得点化して行うプレイングテーブルで11位という成績を残した。

2. 第27回日・中・韓ジュニア交流競技会

（2019／長沙）報告

麻場強化委員長より資料に基づき、2019年8月25日、8月27日に中国・長沙にて行われた日・中・韓ジュニア交流競技会の結果が報告された。多くの種目で優勝を果たした。

3. 日本陸上競技選手権大会100mHの不正スタート判定に関連する事案の再発防止における競技運営委員会の取り組みについて

鈴木競技運営委員長より資料に基づき、第103回日本陸上競技選手権大会100mHの不正スタート判定に関連する事案の再発防止における競技運営委員会の取り組みについて報告された。

※資料1「日本陸上競技選手権大会100mHの不正スタート判定に関連する事案の再発防止における競技運営委員会の取り組みについて」を参照ください。

4. 女性理事・外部理事登用に関する

プロジェクトについて

尾縣専務理事より資料に基づき、2019年6月10日にスポーツ庁が13の原則からなる中央競技団体が遵守すべき規範、「スポーツ団体ガバナンスコード」を制定したことを受け、女性理事・外部理事登用に関するプロジェクトを立ち上げ、メンバーを選出し、活動を始めたことが報告された。

スポーツ団体ガバナンスコードにより、理事に占める女性理事の割合は40%以上、外部理事の割合は25%以

上にすることが求められている。

5. 国際陸上競技連盟報告

横川会長より、国際陸上競技連盟の活動に関する報告がなされた。

○カウンシルメンバー選挙について

○国籍変更問題について

なお、非公開において、「特別寄付金の受領」、「国際陸上競技連盟に申請する東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会NTO (National Technical Official)」を協議し、原案通り承認された。

資料1

日本陸上競技選手権大会100mHの不正スタート判定に関連する事案の再発防止における競技運営委員会の取り組みについて

本件において大きく二つの問題点があった。一つはスタートインフォメーションシステム (S.I.S.) を用いた競技会運営に関すること。もう一つは抗議の取り扱い方に関することである。

1. S.I.S. 使用時の不正スタート判定のあり方

IAAF (JAAF) の承認を受けたS.I.S.を使用する場合は、その判定資料は証拠となるので最優先で尊重しなければならない。それで判定されたリアクションタイムは記録表に印刷され、世界記録公認の条件にもなっている。判定結果を審判長が棄却するのはS.I.S.が明らかに正常に作動していない時だけである。

またオートリコールがあったとしても実際の動作と検知したデータの照合は不可欠であり、スタート信号よりも早く反応しスタートしようとしていた動作なのか、スタート動作開始前の微動であるのかはS.I.S.の解析波形データを見て判断する必要がある。

以上の事柄が周知徹底されていなかった点である。S.I.S.は購入するにしてもレンタルするにしても高価なため、リハーサル大会で使用するにはハードルが高い。そのため主管陸協の負担になってしまうことから強制はできない。

多くの都道府県レベルの競技会ではS.I.S.は使用しないため、全国的な競技会の準備段階で習熟する機会を設けること、およびS.I.S.の取り扱いに関することを全国競技運営責任者会議で情報共有する。

2. 抗議の扱いについて

抗議の取り扱いについても問題があった。T.I.C.は

抗議受付の場所でもあるので、抗議担当総務員と密接な連携が必要であったが、それがなされていなかった。抗議受付時刻や説明終了時刻を記録していなかったこと、上訴の可能な刻限や説明に納得したかの確認も行っていなかった。そのため抗議者は抗議継続中という認識であり、陸協側は納得して帰ったとの認識の相違があった。

抗議の説明については利用可能な資料を取りそろえて説明する必要がある。判定写真や監視ビデオ、S.I.S.のデータ等主催者側が持っている全ての資料は非公開ではなく公開すべきものであり、それによって新たな事実が判明した場合には、審判長は判断を変更することができる。今回はそれもできなかった。

上記の通り、抗議の取り扱いについても全国競技運営責任者会議にて情報共有し、特に全国的レベルの競技会を主管する陸協には周知徹底を図ることとする。

3. 再発防止対策

上記の全国競技運営責任者会議において情報共有し周知徹底を図ると同時に発生防止のためのシステムも必要である。現段階では審判長のアドバイザーとして位置づけているJTOには審判長の判断が明らかに競技規則に則していない場合JTOの判断を優先するという規則があるが、立場上困難なことが多い。そのためIAAFのシステムと同様に競技運営全般についての責任者としてNTD (National Technical Delegate) の導入についても検討したい。

ドーハ世界選手権大会総括

日本代表選手団監督 麻場一徳

9月27日（金）～10月6日（日）の10日間、カタールのドーハで第17回世界陸上競技選手権大会が開催された。

今回の世界選手権は、特に暑熱環境下で開催されることもあり、大きな環境負荷が予想されたが、医事、科学をはじめとするスタッフの努力によって、健康上の大きな問題もなく無事乗り切ることができた。と同時に、来年の東京オリンピックに向けて最終リハーサルとなる大会であり、今回の出来、不出来が東京に直結する、極めて重要な大会と位置づけられた。

日本チームの最終成績はメダル3つ（男子50km競歩1、男子20km競歩1、男子4×100mR1）と入賞5つ（女子マラソン1、男子走幅跳1、男子50km競歩1、女子20km競歩2）。日本記録は2つ（男女混合4×400mR、男子4×100mR）で、そのうち1つはアジア記録（男子4×100mR）というのが、数字としての成果ということになる。

メダルについては、世界大会ではメダルはそんなに取ることはできない中、3つ獲得して、そのうち金メダルが2つということは、来年につながる大いなる成果といえる。男子4×100mR、男子競歩、男女マラソンを、メダルを目指す三本柱として、強化を進めてきたことから、我々の強化施策は、一定の成果を出しているのではないと思われる。

男子50km競歩鈴木雄介選手（富士通）の金メダルについては、彼の素晴らしい才能と努力に加えて、今村文男オリンピック強化コーチを中心とする競歩ナショナルチームの世界大会でメダルを取るための戦略、それから医科学サポートの成果を確実に出せた結果だったのではないと思う。そういう意味では、東京オリンピックに向けた暑熱対策は、成果を出してきていると自信を持つことができる。

男子20km競歩で金メダルを獲得した山西利和選手（愛知製鋼）は、戦略がしっかりしている。東京オリンピックまでのビジョンもしっかりしており、若い選手にもかわからず実に頼もしい。彼については、世界ユース選手権（2013年：10000m競歩で金メダルを獲得）のころから注目していたが、順調にパフォーマンスを伸ばしてきている。

男子4×100mRについては、今回、9秒台（の自己ベストを持つ選手）を3人揃えてのリレーが組めたことは、日本にとって非常に大きなことだった。しかし、小池祐貴選手（住友電工）が本来の調子ではなかったこともあり、決勝は多田修平選手（住友電工）が起用された。急なオーダー変更のなかでも、37秒43のアジア新記録で銅メダル獲得というパフォーマンスが出せるというのは、底上げがきちんとできていることを示すもので、チームとして成熟期を迎えているといえる。男子リレーチームも、東京オリンピックに向けた明確な戦略・ビジョンを持っているので、それが実現できるようにしっかりプロセスを踏んでいきたい。

また、マラソンについても、暑熱対策について、一定の

成果は出ていると考えている。男子マラソンは、想定されていたコンディションよりも気象条件が良くなり、暑熱環境下を前提とした準備をしっかりと行ってきた選手たちには、逆に気の毒だったと感じた。しかし、反省材料も含めて、「暑熱対策に関しては成果があった」と感じている。あとは、個々の特性にどう適応させていくかがこれからの課題となる。

入賞5については、「もう少し欲しかった」というのが率直な感想である。プレイングテーブルでは33点で11位。これまでの世界選手権、オリンピックの結果と比較すると良い結果だが、来年の東京オリンピックにおける陸上競技の盛り上がりというのを考えると、もう少し、特にトラック&フィールドの種目で入賞者が欲しかった。結局、トラック&フィールドの個人種目では、入賞者は橋岡優輝選手（日本大学）の走幅跳のみに止まった。惜しいところで入賞を逃した選手が多数いる中、その惜しいところをどうやって引き上げ、コンディションを整えて東京オリンピックに臨めるかが、これからの大きな課題となる。

今回の世界選手権を終えて、東京オリンピックのメンバーは8割方その顔が見えている状況かと思う。これからは、それらのメンバーを中心に重点的なバックアップを進めて行く段階にある。また今回、ダイヤモンドアスリートを中心とした伸び盛りの若手アスリートの躍動も印象的であった。彼ら、彼女らが更にレベルアップして東京の舞台に立ってくれることはとても楽しみであり、しっかりバックアップしていかなければならない。

T & Fディレクター 山崎一彦

メダル1、入賞1

個人種目では男子走幅跳で橋岡優輝（日大）が8位入賞した。予選は2本目で落ち着いて1本目の修正をし、決勝進出を決めた。決勝はパーフェクトではない跳躍であったが、3回目でベスト8を決める勝負強さを見せた。橋岡は日本記録こそ城山正太郎（ゼンリン）に先を越されたが、昨年U20で金メダル、今年のユニバーシアードでも金メダルと安定した勝負強さを身につけている。オリンピックまでに日本記録相当を出すことができれば、勝負強さを考えるとメダル獲得も夢ではない実力となるだろう。

金メダルを目指した男子4×100mRは、予選で38秒76という日本記録に近い記録で安定感のある内容であった。しかしながら、海外チームの記録水準は予想を上回る状況であり、決勝でのプラスアルファがなければ、メダル獲得も厳しい状況となった。予選の状況から、第1走者の小池を多田に変更して決勝に臨んだ。今までの日本チームは、なるべく予選の走者を変えず流れに乗っていくということが多かった。他国チームも予選でかなりのレベルで走ってきたことや金メダルを狙うという目標達成のために走者変更の選択をした。その結果、予選よりタイムを上げてアジ

ア記録の再更新することができた。これらは土江強化コーチの判断の的確性が光る結果となった。海外の状況を見ると、リレー種目も軽視しない状況となってきている。世界歴代2位のアメリカ記録で金メダルを獲得したアメリカは100m金メダルのコールマンは200mを回避してリレーに専念、200m金メダルのライルズも予選を回避してリレーの決勝へ万全の状態で勝負してきた。一方100m、200mに2名が2種目で入賞した選手を擁するカナダは予選落ちするという対照的な結果となった。2020年で日本が金メダルを獲得するためには、選手が個々の力を上げていくことはもちろんだが、いかに万全に調子を合わせていくかも十分慎重に考えていかなければならない。

メダル、入賞するためには自己記録達成率99%が必要

今までは、トラック種目は約98%、フィールド種目は約97%あたりの自己記録達成率を出せれば、ほぼ実力を出し切ったことになるという認識であった。たしかに自己の力を出し切るというのは、最低限の目標であるが、メダルおよび入賞を期待されている私たちにとっては、厳しい観点で分析していかなければならないこともある。その観点では過去のオリンピック、世界選手権のメダルおよび入賞者の自己記録達成率をみると、事前に入賞圏内の記録を持っており、なおかつ自己記録達成率は99.6%出さなければ入賞しないという数字も出ている。この数字に近い記録を出した選手は、男子110mHの高山峻野（ゼンリン）が予選で99.5%、400mHの安部孝駿（ヤマダ電器）が準決勝で99.4%の2名であった。高山は、準決勝では途中までトップを走る見せ場をつくったがハードルを大きく倒してしまい減速した。このことから決勝進出は極めて実現可能の領域に入ったと言ってよい。安部も準決勝では100分の4秒で決勝を逃したことから、準決勝の組み分けとレース展開次第では決勝に残れる可能性が高かったことになり、非常に惜しい結果であったということになる。ただし、48秒40を出しながら失格になった選手などがいたことから、決勝進出ラインは48秒9ではなく、48秒5、6となりそうであるため、48秒前半の自己記録で本戦に挑んでいくことができれば、確実に入賞するラインに到達することができるだろう。前述の金メダルが期待されている男子4×100mRは予選から99.5%、決勝では100.5%と改めて日本のリレーの精度が高いことを示した。

入賞の期待できた選手たち

男子100mはサニブラウン・アブデル・ハキーム（フロリダ大）、桐生祥秀（日本生命）、小池裕貴（住友電工）ともに決勝進出が見えるラインにいた。しかしながら、3人ともに準決勝進出したが残念ながら決勝進出はならなかった。3者ともに予選で余裕を持っての準決勝進出をしておらず、準決勝では起死回生の1本を意識しながらとなっていたように見えた。そのような状況で決勝進出をするというのはかなり難しい状況であると感じた。3人とも強豪選手とのレースも多数経験してきているので、今後は予選からいかに良いレースをしていくかが課題ではないかと感じた。

今シーズン64m36の日本記録を更新した女子やり投の北口榛花（日大）は、現地の練習からあまり安定感のない状

況で決勝ラウンド進出まであと少しだった。10月27日北九州カーニバルで今季世界ランキング7位に相当する66m00の日本記録を更新したように、実力は確実に付いている。あとは、その日のその一本が投げられれば良い状況でますます楽しみになってきた。

春先の室内で日本記録をマークして力を確実につけてきた男子走高跳の戸邊直人（JAL）は、シーズン後半少しずつ調子が下がった状況で本選手権を迎えてしまったこと、マットが合わずに気になってしまったことなどで力を発揮することができなかった。

8位入賞すれば、オリンピック枠を取ることができる男子4×400mRは、昨年から戦術を変えて前半200mの入りの速度を高くすることに挑戦してきた。世界リレーに続き、レースの流れは良かったが、あと一歩及ばず、全体9位で決勝進出を逃した。これで来季も記録挑戦をしていく戦略となることとなった。加えて、入賞を期待できるレベルには至らなかったが、Mix4×400mRは日本記録を更新して、今季ランキング16位に上昇させ、オリンピック出場へは皮1枚つながら結果となった。

男子400mのウォルシュは、予選、準決勝ともに自己記録をマークして実力を発揮した。44秒6から日本記録あたりが決勝のボーダーなので、まずは日本記録の更新を期待したい。

長距離・マラソンディレクター 河野 匡

今大会は、2020東京オリンピックを見据えて世界の動向を確認するとともに、暑熱対策のリハーサルとしてこれまで培ったノウハウを試す機会と位置付けた。

男女マラソン、女子長距離、3000m障害をメインにサポートも行ったが、結果的には女子マラソンが2大会ぶり7位入賞したのが最高の成績であった。女子5000m、10000mも健闘し、東京オリンピックに向けて戦える兆しが見えたのは収穫である。世界選手権の成績はワールドランキングポイントが2020東京オリンピックまで有効であるため、成績を残した選手は日本代表権争いで大きなアドバンテージを得ることができた。

〈現地でのコンディショニング〉

気象条件は4月のアジア選手権とは比較にならないほど高温多湿で、特に夜になって湿度が高くなり気温が下がってもWBGTが下がらずロード種目においては対応に苦慮した。ホテル内及び移動バスはエアコンが効き過ぎて寒く、外は高温多湿の環境下となり冷蔵庫とミストサウナを行き来しているように感じた。選手はコンディショニングに神経を使ったと思うが、スタッフの献身的なサポートもあって、期間中大きく体調を崩す選手が出なかったことは幸いであった。選手村のホテルは5つ星で食事もよく問題なかった。

各強化コーチ、担当コーチからの報告をもとに競技種目別にまとめた。

〈女子長距離〉コーチ：野口英盛、岩水嘉孝、齋藤由貴

女子長距離としては、5000m決勝進出・10000m入賞者を出すことを目標に掲げた。両種目ともに、海外レースの経験豊富な新谷仁美（NIKE TOKYO TC）、田中希実（豊田自動織機TC）がレースに対して積極的かつ冷静に対応

し結果を残した。

10000mでは、新谷がラスト600mまで入賞争いに加わり31分12秒99のシーズンベストで11位。5000mでは、田中が予選・決勝で自己記録を更新する圧巻の内容であった。14分台に僅か届かず15分00秒01で14位だったが大変評価できる結果であった。大会後の選手のコメントを見ても、国際大会では出場するだけでなく結果を出すということに意識しているかが重要だと感じた。2020年東京オリンピックに向けては、シーズンベスト、自己記録を本番で出すことができれば十分戦えるので、国際舞台で100%の力を発揮できるメンタル面の強化が重要であるとともに入賞するためにはラスト1周のスプリント能力向上が必要不可欠である。この課題に強化スタッフ、強化選手、専任コーチと協働する体制作りを行い、東京オリンピックに向けて更なる強化を進めていきたい。

〈女子3000m障害〉コーチ：岩水嘉孝

吉村玲美（大東大）が大会直前のインビテーションにより出場権を獲得した。トレーニングが駅伝シーズンに向けて移行している中での国際大会はモチベーションを高めるのに苦労したと思う。結果的には9分55秒72の13位で予選落ちであったが、冷静にレースを進め実力を出し切った。今後に向けて走力の向上と障害技術が改善すれば日本記録に届く可能性を秘めている。この経験を活かし東京オリンピック代表を目指して成長して貰いたい。

〈女子マラソン〉コーチ：武富豊、立田奈津子、里内正志

高温多湿の悪条件を踏まえ、終盤まで日本選手が集団となりペースを守り余力を持って終盤追い上げていく作戦が見事に功を奏し、谷本観月（天満屋）が7位入賞、中野円花（ノリツ）も11位と健闘した。池満綾乃（鹿児島銀行）は体調不良により途中棄権に終わった。3名とも初の日本代表であったが経験豊富な武富監督を中心にチームとして戦えたことが入賞に繋がった大きな要因である。陸上競技においてチームとして個人種目を戦うには難しい面も多々あるが、外的影響の正確な把握と的確な判断を共有する体制作りは東京オリンピックに向けて改めて重要だと感じた。

〈男子マラソン〉コーチ：坂口泰、花田勝彦、松永信也

今回の世界陸上はMGCと時期が重なり、MGC有資格選手の中から世界選手権を希望選んだ川内優輝（あいおいニッセイ同和損保）と初代表の二岡康平（中電工）、山岸宏貴（GMOアスリッツ）が出場した。

レース展開としては女子マラソンの状況、ドーハの気象コンディションを考慮して後方から着実にタイムを刻むことで入賞する可能性があると考えていた。しかし、レース当日は女子マラソンとは一転し涼しささえ感じる条件となった。川内は暑さに弱いことを自覚し、できる限りの暑熱対策を施し臨んだが、本来の実力を発揮できなかった。レースプランが女子マラソンの酷暑を想定した展開であったので、予想外の涼しさに適応できなかった面もある。山岸25位が最高で川内29位、二岡が37位に終わった。入賞するために落ちてくる選手を拾っていくパターンでは戦えないことを痛感するとともに実力不足は明らかであった。この経験を糧に今後の成長を期待したい。

男子短距離・リレーコーチ 土江寛裕

今回のドーハ世界陸上は、来年に迫った2020年東京オリンピックへ向けての強化が、どの程度成果として現れるか、それを確認する上で非常に重要な位置付けであった。男子短距離としては、個人種目においては、サニブラウン、桐生、小池の3名がベスト記録を9秒台に高め、その他のメンバーも高いレベルに到達した状況での出場であり、複数名が決勝を経験しておくことを期待していた。リレー種目では、4x100mリレーでの金メダル、マイルは決勝進出して両リレー出場権を得ることを目指した。

まず、個人種目については、サニブラウンが準決勝のスタート音が聞きとりにくい状況であった（本人談）ことにより出遅れてしまい、決勝進出を逃した。スタートが決まっていれば決勝進出は確実であったと思われ、非常に勿体ないレースをしてしまった。桐生、小池とも準決勝へ進出したが、決勝進出はできなかった。3名とも自己ベスト付近で走れば決勝へ進出できるレベルにあったにもかかわらず、それを逃した。世界大会の準決勝という舞台でどれだけベストパフォーマンスを出すことの難しさを改めて確認した。世界大会では計り知れない心理的なプレッシャーがかかると思われ、来年までにそれを解決するためには、できるだけ多くのレベルの高い競技会において経験をさらに積んでおくことが重要であると思う。これまでも陸連男子短距離として多くの海外遠征をしてきているが、それを成果として実らせる必要がある。

また、400mにおいては、ウォルシュが準決勝進出を果たした。予選、準決勝とも自己ベストをマークし、持っている力は出し切れたと思う。しかしながら、決勝へ進出するには日本記録以上の記録が必要であり、東京オリンピックでそれを実現するには、この冬、実力をもう1-2段階引き上げなければならない。これについてはJSC次世代ターゲット育成支援事業（JSC次世代事業）により、アメリカでのトレーニングを実施する予定であるが、そこで何かを掴んでほしい。

400mリレーに関しては、本来走るべき小池が本調子ではなく、決勝では多田に変更せざるを得なかったが、それでも37秒43のアジア新記録をマークし、銅メダルを獲得した。リオで37秒台に突入するだけでなく37秒60まで一気に記録を伸ばしたが、それをさらに0秒2近く更新することができ、目標とする記録を達成できた。しかしそれでも銅メダルであり、目指すところの金メダルはまだ遠いと感じた。これまでの日本チームのリレーの記録は、それぞれの選手のシーズンベストの合計から、良い時で6.5%前後の利得を得ることができていたが、今回はそれを7%に近づけることを目指してきた。今回の結果は6.97%であり、ほぼ目的を達成できた、すなわち非常に精度の高いバトンパスが実現できたと言える。サニブラウンが200を辞退し、100からリレーまでに時間ができたことにより、精度の高いバトンを作り上げることができた。しかしそれでも銅メダルであり、言い換えれば、これ以上バトンの精度を高めて記録の向上を目指すのは難しく、金メダル獲得には、個人の走力を高めなければならないことを意味する。この数値から逆

算すると、今回優勝したアメリカチームレベルの記録(37秒10)をマークするには、個人の記録を9秒95前後まで引き上げなければならない。この冬の課題はそこにあり、これまで以上に個人のレベルアップを図る工夫をしたい。

一方、4x400mリレーについては、昨今の4x400mリレーのスピード化(前半の200mの入りが以前と比較して速い)に対応すべく、スピード強化をはかりながら一昨年から東京オリンピック出場を目指していた。ウォルシュが非常によい状態であったため、1走に配置し、その後レースの流れに乗れるよう、飯塚、佐藤、若林を配置した。飯塚が9月に入って軽い故障したこと、5月の世界リレーで好走した井本も、その後怪我に苦しんだこと、他の候補者で飛び抜ける選手が出て来なかったことで、最後までメンバーが決まらずに選手に苦勞をさせることになってしまった。結果的にはベストメンバーで組めたと思う。しかしながら100分の9秒差の9番目で決勝を逃した。あと一息であったので、非常に悔やまれる結果であった。しかし東京オリンピックへ向けた記録のランキングとしては、シード9カ国を除いてのランキング1位であり、出場の可能性は高い。一方で各選手のレベルがまだ非常に低く、さらなる強化が必要である。この冬はJSC次世代事業などを駆使し、東京オリンピック出場に向けてさらに強化を図る予定である。

ミックスについては最下位という結果であった。男子4x400mリレー以上に厳しい状況であるが、まずは男子4x400mの出場権を確実にした上で、ミックスについても戦略を考えたい。

ゴールドターゲット(男女競歩) 今村文男、清水茂幸

今大会では、男子競歩において金メダルを含むメダル獲得と入賞者を最大化するという目標を掲げて、ブロック強化施策として、暑熱対策、競歩技術、コンディショニングに重点を置きながら代表選手の強化を進めた。特に、暑熱対策では、今日までの取り組みを検証し、個別対策が最も重要であり、個人特性にあった暑熱対策と暑熱順化が求められることから、例年行っている競歩日本代表合宿という形態を取らずに個々の強化目標や目的に応じて、参加できるようにブロック強化事業と連動させ日本陸連科学委員会と連携を図りながら実施した。そして、そのような取り組みを通して、競歩種目では、男子20km競歩3名、男子50km競歩3名、女子20km競歩2名、女子50km競歩1名の9名が出場し、金メダル2、入賞3の結果を取めた。

以下、各種目について報告する。

男子50km競歩において、鈴木が競歩史上初となる金メダルを見事に獲得した。

スタート後、間もなく独歩状態を築き、35km地点では、2位を3分34秒引き離したが、ここから脱水や熱疲労の影響で大幅にペースダウンした。しかし、戦略的なリカバリー方法で最後まで先頭を譲らず39秒差で金メダルを獲得した。競技中は、気温31℃前後、湿度73%前後の高温多湿で過酷な環境であったが、給水量、給水温度調整、身体のクーリング法など効果的な暑さ対策が功を奏した結果だったと言えよう。

一方では、レース中の体調不良により大幅なペースダウンや途中棄権となった野田や勝木については、今大会までの強化期間や現地調整を振り返りながら今後の諸対策を検討して欲しい。また、女子50km競歩では、4月日本選手権50km競歩大会以降の強化期間に整形外科的な不安があった瀧瀬が、日本陸連医事委員会ドクターやトレーナーなど医療連携によって、11位でフィニッシュできたことは評価できる。

男子20km競歩は、全員が世界ランキング10位以内というメンバー(山西、池田、高橋)で臨んだ。20km競歩は近年世界リストの上位を独占し続けてきたが、なかなか世界選手権、オリンピックではメダルに手が届かず、50km競歩に遅れをとる状況となり歯がゆい思いを続けてきた。そのような中で、山西はワールドリーダーとして金メダルを狙って、同種目初、そして、競歩史上2人目となる金メダルを獲得した。

レースは気温32度、湿度80%の競技環境でスタートが切られた。最初の1kmが4分32秒、5kmが22分26秒前後での通過となり、かなりゆっくりとしたペースでレースが進んだ。しかし、山西が7km過ぎから集団を抜け出しトップに立った。その後、徐々に2位集団と差が開き始め、10km通過時は2位と17秒差となった。その後も山西はリードを続け、15秒差で見事1位フィニッシュした。池田は7km過ぎで山西にやや遅れをとったものの2位集団でしっかりとレースを進めた。14km過ぎから4位となり、その後やや順位を落としたものの、粘り抜いて最終的には6位フィニッシュし、同種目初のダブル入賞となった。高橋は、落ち着いた歩きで終始8位~10位のポジションでレースを進めた。最後8位でフィニッシュするものと思われたが、アクシデントも伴い、本人にとっては悔しい10位フィニッシュとなったが、各人がしっかりと持ち味を發揮したレースであったと言えよう。

女子20km競歩は、2015北京大会以降、岡田のみのエントリーが続いていたが、今大会では新鋭の藤井が代表に加わり、また6月に岡田が日本記録を10年振りに更新したことも加えて、国際競技力が高まった状態で本大会を迎えることができた。

レースは気温31度、湿度71%の競技環境でスタートが切られた。夜間のレースということを考えれば十分すぎるほど過酷な競技環境であったが、2人とも現地の調整うまくいき、良い心身の状態スタートすることができた。

最初の1kmが5分2秒、5kmが24分1秒前後での通過となり、かなりゆっくりとしたペースでレースが進んだ。序盤から中国勢を中心にレースが進み、18kmまで中国3選手が先頭争いをしていたが、最後はリオ五輪の金メダリストHong LIUが他の選手を突き放し優勝を決めた。日本勢は岡田、藤井が序盤からはほぼ並ぶような形で歩き続けた。10km通過時は14位及び16位だったものの、12km通過時には8位及び9位と入賞圏内となった。その後19kmまで6位及び7位のポジションでレースを進めたが、最後は岡田がペースアップし、岡田6位、藤井7位でフィニッシュした。女子の入賞は2009ベルリン大会の瀧瀬以来であったが、今回はダブル入賞という快挙を達成することができ、女子競歩として、2020東京オリンピックへ大きな弾みがついたと言えよう。

第218回/第219回国際陸上競技連盟(IAAF)カウンシル会議及び第52回IAAF総会報告

会長 横川 浩

第218回国際陸上競技連盟カウンシル会議(2019年9月23日)及び第219回同会議(10月1日)がカタール・ドーハで開催されたので、IAAFカウンシルメンバーとして参加した。また、第52回IAAF総会及びコンベンション(9月25日、26日)も同地にて開催された。

第218回、第219回国際陸上競技連盟カウンシル会議 概要

1. ロシア問題

ルネ・アンデルセン調査団長から報告が行われ、ロシアドーピング問題の解決に向けては進展が見られたが、依然として懸念される状況が見られることから、資格停止処分を継続すると決定した。活動禁止とされているコーチが現在でも指導している事例が確認され、復帰条件として挙げられている、ロシア陸連によるドーピング防止への真摯な取組みに疑義が唱えられた。加えて、世界反ドーピング機構(WADA)が今年1月、モスクワの検査所から回収したLIMS検査データに不整合な部分が見つかり、提出前にデータの一部が消去された可能性がある事が発表された。WADAはロシア反ドーピング機関に対するコンプライアンス手続きに入った。

2. ガボン共和国の会員資格

ガボン共和国はIAAF会員資格を満たしていない事から、今総会への出席権を剥奪され、来年3月末までに改善がない場合には、追加制裁が検討される。

3. IAAF規則の改定

●第141条(年齢と性別)が2019年10月1日付で改定となり、女性から男性に性転換した男性についても定義を追記し、出場資格はカウンシル承認事項となる。

●第260条.10(d)が2019年11月1日付で改定となり、従来は毎年1月1日現在の世界記録認定リストを各加盟団体向けのサーキュラーとして公表していたが、今後は実施しない。

●第261条の女子競歩50000mの世界記録に関する規定が改定となり、2019年1月1日以降、4:20:00を上回る記録が認められた場合、世界記録として公認される。

4. IAAF競技会における広告及び展示物に関する規定の改定

WASや国際競技会に於ける、競技者の衣類や競技中に使用されるその他の衣類に関する規定を改定する事で基本的な合意に達し、次回のカウンシル会議で新規定が提案される。方向性としては、ロゴの数の増加やサイズ拡大を認め、各加盟団体やナショナルスポンサーに対してよりフレキシブルに対応する事で検討されている。競技会会場での広告についても改定を行い、例えば器具に関する規則を軽減する方向性である。

5. トランスジェンダー競技者の参加資格に関する規定の承認

2011年に発行された、“Regulations Governing Eligibility of Athletes who Have Undergone Sex Reassignment to Compete in Women’s Competition” は、“Eligibility Regulations for Transgender Athletes” に代わる。上記に記した女性から男性のトランスジェンダーの記載追加に加え、トランスジェンダーの女子選手は新たな性を法律上で認められる必要は無く、女性であると申告する署名付きの宣誓書を提出し、テストロン値の血中濃度を、適格と見なされる前の少なくとも1年間は、連続して1リットルあたり5ナノモル以下としなければならない。又、この分野のパネルとして、5名のエキスパートが任命された。

6. オリンピック及び国際陸連主催大会(WAS)の準備状況

●オリンピック:大会組織委員会との調整準備が順調に進んでおり、各種詳細を決定する段階に入っている。

●2019世界陸上ドーハ大会:大会準備報告が詳細に行われた中で、暑さ対策の強化が説かれた。

●2021世界陸上オレゴン大会:準備計画が順調に進み始め、11月にサイトビジットが行われる。

●2021世界リレー:開催場所はポーランド・シレジア、日程は2021年5月1日/2日。

●今後のWAS大会の開催場所は以下のカウンシル会議で決定する:

2019年11月開催のカウンシル会議:2022世界室内、2022世界ハーフマラソン

2020年3月開催のカウンシル会議:2022競歩チーム選手権、2022U20世界選手権

7. パートナーシップの更新:TDK(～2029年)、アシックス(～2029年)、モンド(～2024年)

第52回IAAF総会及びコンベンション概要

1. 総会は9月25日/26日に行われ、先ずは役員改選の投票が行われた後、IAAF事務局、各エリア連盟、IAAF委員会や部会等の報告へと続いた。9月26日午後には、“Time to Build & Grow”というテーマの下、コンベンションが行われる予定であったが、時間の関係で短縮した形での実施となった。

2. 役員改選の選挙が実施され、新体制では、ジェンダーバランスの観点から、女性には副会長に1名、カウンシルメンバーには女性5名(7名枠から副会長と選手委員会代表を差し引いた人数)が少なくとも選ばれる事となった。

国名の後の*印は女性。

●会長:Sebastian Coe(GBR)

●副会長(4名):Sergey Bubka(UKR), Geoffrey Gardner(NFI), Nawaf Bin Mohammed Al Saud(KSA), Ximena Restrepo(CHI*)

●カウンシルメンバー(13名):Hiroshi Yokokawa(JPN), Antti Pihlakoski(FIN), Anna Riccardi(ITA*), Nan Wang(CHN*), Adille Sumariwalla(IND), Nawal El Moutawakel(MAR*), Abby Hoffman(CAN*), Sylvia Barlag(NED*), Alberto Juantorena(CUB), Willie Banks(USA), Raul Chapado(ESP), Dobromir Karamarinov(BUL), Beatrice Ayikoru(UGA*)

上記選挙で選出された個人カウンシルメンバーに加え、各エリア代表(会長)6名と選手委員会代表2名(男女各1名、年内に選挙委員会内で決定)が加わり、カウンシルメンバーは合計26名で構成される。各エリア代表は以下の通り。

AAA: Dahlan Jumaan Al Hamad(QAT), NACAC: Mark Sands(BAH), CONSUDATLE: Helio Gesta De Melo(BRA), AFRICA: Hamad Kalkaba Malboum(CMR), EUROPE: Svein Arne Hansen(NOR), OCEANIA: 今後選挙で決定

3. Sebastian Coe会長は今後の4年間で、“Time for Change”から“Time to Build”に移行しなければいけない事を強調した上で、過去4年の間にあらゆるステークホルダーの協力の下、IAAFという組織を変革できた事に感謝した。

組織のインテグリティが強化され、新たな2017/2019憲章が策定された。ワールドランキング制度が導入され、今後は新しい形のダイヤモンドリーグやコンチネンタルツアーの確立へと繋げられる。コミッションはコンペティション、ガバナンス、ディベロップメント、アスリートコミッションの4つから成り、専門性の必要な分野にはワーキンググループが立ち上がる。11月以降、IAAFはWorld Athletics(ワールドアスレティックス)に生まれ変わり、ロゴも一新され、その更なる発展を目指す事になる。

世界選手権視察報告1

ドーハで開催されたIAAF世界陸上競技選手権大会では、2020年の競技運営を見据えた関係者も派遣された。

競技運営委員会

鈴木一弘 委員長：競技運営全般

関根春幸 副委員長：TIC

施設用器具委員会

山口賢司 委員：技術総務

米岡利昌 委員：技術総務

事務局

風間明 事務局長：競技会ディレクター

関幸生 国際担当部長：技術代表としてIAAF派遣

視察報告を2回に分けて掲載する。

競技運営委員会 委員長 鈴木 一弘

東京2020のスポーツマネージャーとしてIAAFからの招待を受け、関根副委員長を同伴者としてADが発行され視察を行った。

1. 監察員

100mでは配置を確認できなかった。違反行為等を鑑みると配置の重要性は低いと考えられ、監視カメラで十分対応可能ということ、競技役員を減じるという方針からして納得できる。

ハードルは、それぞれ側方に配置。400mHでは前半のハードル間が広い箇所では2～3名、後半は1名で、トラック外側に配置。

2. 100mの出発準備

スタート練習の際、遠くまで走らせないように競技役員が2名、約60m地点で制止していた。競技者紹介の直前にスタート地点側方に移動し、3名1組で、ブロックと足の接触確認後ラインと手の確認をしてから側方に離れるという動きをしていた。

3. フィールド競技

すべて坐位で判定。長時間、冷静に注意力を持続することを考えると望ましいと思う。

4. 砂場均し

補助員が行っていたが、ムラがスタンドからでもわかるほどだった。計測はVDMなので痕跡をビデオ画像による確認で心配ないかもしれないが、高低差があると公平ではなくなるので、ある程度慣れた人を充てるようにすることが信頼性を高めることになる。

5. 競技者動線

第1招集 (First Call) としてW-up場から主競技場につながる通路を利用してGathering Pointを設けていた。大きなデジタル時計が置かれており、時刻をきちんと認識できるようにしていた。

招集所 (Final Call Room) は主競技場に入ってすぐの部屋にトラック4区画、フィールド4区画にそれぞれ10席ずつシートを設け、壁面に注意事項を掲載した形式で作られていた。部屋が狭かったため競技者はそこに入ると点呼・点検・待機のみで体を動かすことはできない状況であった。

フィニッシュ後は階段を上ってTV-Mixed Zoneを経てからスチール/ベン/Mixed Zoneに至り、その後、地下通路を経てW-up場に戻るといった流れであった。

6. 競技場

競技場にはエアコンが装備されていた。観客席部分は屋根に覆われており、冷気は上昇しないので観客席上方から吹き下ろす冷気は競技場全体を冷やすには十分で、観客席で見ていた分には長時間になると逆に寒さを覚えるほどであった。トラック周辺にも送風口があり、競技時には停止させていた。

7. 表彰

表彰式は、第2曲走路入り口付近のスタンド上方に作られたステージで行われた。

国旗掲揚はなく、大型スクリーンに国旗がはためく映像をもって代替。

8. ケーブル配線

放送関係や計測機器などのケーブルがトラック内外に多数、雑多に配置。適切に保護しないと断線等が発生し事故・故障のもとになる。

9. 監督会議

会議資料は配布とともに、壇上の説明者の背景に投影され、理解しやすい工夫がされていた。前日までに受け付けていた質問についても回答が印刷配布されており、効率よく実施。

10. プレゼンテーション

・競技者入場は決勝では100mスタート地点の大型LEDディスプレイ製のゲートを使って演出を行いながら入場していた。

・MCを使ってプレショーや優勝者のコメントを実施。

・フィールド競技では分離移動型のLEDディスプレイを競技場所付近に運びエントリーゲートを作り、決勝開始前の競技者紹介を行っていた。これはテレビ向けであり、スタンドから見れば仕掛けが丸見えであった。

・トラック上に投影されるプロジェクションマッピングは圧巻と言えるものであった。

11. 周回記録

5000m、10000mにおいて周回遅れの競技者に対しても早い段階から丁寧に手持ちのカードにより残り周回の告知をしていた。

12. 救護体制

男子5000mにおいて周回遅れで最後の1周において、ふらつきがひどくなり歩行もままならない状態の競技者がいた。後続の競技者が肩を貸してフィニッシュし、結果、助力を受けた競技者は失格となった。

ふらつき始めたところで誰も確認に近寄らないことが不思議であった。医師もしくは審判長に失格・除外の権限が与えられているので、もっと早く判断すれば悲劇/感動は起こらなかっただろう。

競技運営委員会 副委員長 関根 春幸

1. TIC業務

部屋は手狭で、隣にビデオ室、通路を挟んで打ち合わせ室など。個人持ち込みの投てき物はTICでなくW-up場の一角で受付。

リザルトやスタートリストはメールでチームリーダーに送信する形がとられ、TICで印刷物を配布する場面は多くなかった。国ごとのビジョンボックスはなく、ネットで確認するよう丁寧に説明していた。

廊下に貼りだされるリザルトには発表時刻が手書きで書かれ、抗議対応の時刻がどこまでかはっきり明示していた。

競技開始時は、コーチ席のチケット発行、各種パスの発行、ファイナルコンファメーションの受け取り、リレーオーダー用紙の発行など、後半は質問・抗議対応が中心であった。

道路競技では、コースに専用のTICが設置された。

2. 抗議対応

抗議には、ビデオ審判長やジュリー秘書と連携しながら対応していた。

ラインを踏んで失格とか、1/100では同タイムだが、1/1000まで拡大すると差があり決勝に進めないなどの事例では、そのたびにビデオを見たり、写真判定画像を確認したりなど丁寧に対処をしていた。

3. TIC書式

リレーオーダー用紙、一般質問受付、個人持ち込み器具申請書、質問抗議受付書、上訴申立書などが揃えられており、書式は英語のみ。

4. 通訳

通訳はスペイン語、フランス語、中国語に堪能なメンバーを配置。ロシア語の対応で少し苦慮する場面があった。

TICの業務をするにあたり、どんな仕事があるのか事前にしっかりと把握をし、役割分担をすること、自分に割り当てられた仕事だけでなく、他の人がどんな仕事をしていてどんな対応をしているのか情報交換を密にすることが大事であることを改めて認識した。

東京2020では効率的かつ組織的なTICの運営を実行していきたい。

陸上競技研究紀要投稿募集について

日本陸上競技連盟では、指導者への有益な情報の提供を目的に、毎年、陸上競技研究紀要を発行しています。

内容は、みなさまからの投稿論文、特集企画、科学委員会の研究報告、

医事委員会からのレポートなどで構成しています。

3月中の発行を予定しております、陸連ホームページに掲載いたします。

2020年1月末日締切で投稿論文を募集していますので、奮ってご応募ください。

「陸上競技研究紀要」 (Bulletin of Studies in Athletics of JAAF) 投稿規定

陸上競技研究紀要編集委員会

1. 投稿資格について

特に制限は設けない。

2. 投稿内容および種類について

投稿内容は陸上競技についての理論と実践に関するもので、内容に応じて、総説、原著、研究資料、実践報告（指導法および指導記録の報告）、文献紹介に分類される。スタイルは和文、英文のどちらでもよい。

投稿論文には上記の投稿種別を明記し、英文のタイトル、著者、所属、総説および原著には要約（150語以内）をつけなければならない。

（注：何らかの理由で英文要約等の作成が困難な場合は、編集委員会にその旨をご相談ください）

3. 採否等について

原稿は査読を行い、査読結果をもとに採否および掲載順序の決定、校正などは編集委員会が行う。

4. 原稿の書き方について

本文は、横42文字×縦38字でA4 1頁とする。1頁は約1600字、刷り上がり10頁以内、図表もその頁数に含む、すべて白黒にて作成すること。

計量単位は、原則として国際単位系（m, kg, secなど）とする。

また、英文字および数字は半角とする。

5. 文献の書き方について

本文中の文献は、著者（発行年）という形式で表記する。

例）田中（1996）は _____

文献は、原則として、本文最後に著者名のABC順で記載する。

書誌データの記載方法は、著者名（発行年）、論文名、誌名、巻（号）、ページの順とする。

例）吉原 礼、武田 理、小山宏之、阿江通良（2006）女子棒高跳選手の跳躍動作のバイオメカニクスの分析、陸上競技研究紀要、2：58-64。

伊藤 宏（1992）陸上競技の発育・発達。陸上競技指導教本—基礎理論編—。日本陸上競技連盟編、大修館書店、55-72。

同一著者、同発行年の文献を複数引用した場合は発行年の後にa,b,cをつける。

例）田中ら（1996 b）は、 _____

6. 原稿の提出先

投稿原稿（本文、図表など）は、下記へE-mailの添付資料として送付する。

〒160-0013

東京都新宿区霞ヶ丘町4-2

JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE 9階

日本陸上競技連盟

「陸上競技研究紀要」編集委員会宛

Tel：050-1746-8410

E-mail：kiyou@jaaf.or.jp

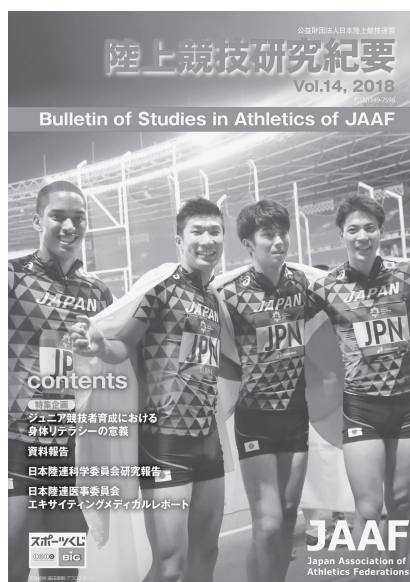
7. 原稿の締め切り

原稿の締め切りは特に設けず、随時受理し、査読を行う。ただし、2019年度版は、2020年1月末日とする。

8. その他

本研究紀要に掲載された内容の著作権は公益財団法人日本陸上競技連盟に帰属する。

（2019年10月 改訂）



令和元年度「体育の日」中央記念行事2019 報告

指導者養成委員 櫻田 淳也

「令和元年度「体育の日」中央記念行事2019」がスポーツ庁他の主催により、味の素ナショナルトレーニングセンター（以下：NTC）で開催された。前日までの台風19号の影響により、開催中止も検討された中、午前中の「アスリートふれあいジョギング」や「アスリートふれあい大運動会」は中止になったが、午後の陸上教室は実施された。また、被災地、被災者、周辺住民への配慮から、実施に際しては音楽等はいわず、またイベントタイトルも「スポーツ祭り2019」から「令和元年度「体育の日」中央記念行事」に変更し、行われた。

本行事は、陸上競技以外にもオリンピックやトップアスリートがゲストとして参加するイベントであり、陸上競技からは、松下祐樹選手（ミズノ）、中村大地選手（ミズノ）、右代啓祐選手（国士舘クラブ）、本連盟指導者養成委員でもある宮崎久氏に参加していただいた。雨がやまない中での実施となったが、NTC陸上トレーニング場は屋根つきのトラックであり、参加者、保護者が雨に濡れないように最大限の配慮をしながら行った。

今回のメインイベントは、子供達による「障害物リレー」および「4×100mリレー」であった。参加者を4つのチームに分けて、各チームにトップアスリートが入るといった形で行われた。障害物リレーはリングバトンを用いた「ミニハードルとヴォーテックス投げ（まど当て）」を行いながらのリレー、4×100mリレーは本物のバトンを用いた「1人100m」を走ってつなぐリレーであった。

当日は、まず松下選手によるハードル走のデモンストレーションが行われた。5台設置されたスプリントハードルでのデモンストレーションであった。ハードリング技術に定評のある松下選手のハードル走に、子供達からは歓声があがっていた。続いて砲丸投げピットに移動し、中村選手に砲丸投げのデモンストレーションを行っていただいた。回転投げから繰り出される砲丸の大きな軌道に、子供達からは驚きの声が上がっていた。最後の右代

選手にヴォーテックス投げのデモンストレーションを行っていただいた。こちらでも子供達の予想ははるかに超える投てき距離であったため、驚きの声があがり、数本の投てきを披露していただいた。

デモンストレーションが終わり、次は4つのチームに分かれて、各チームでトップアスリートの指導による、ウォーミングアップ、ミニハードル、ヴォーテックス投げの練習が行われた。選手によってウォーミングアップや練習方法も異なり、子供達はトップアスリートからの直接指導に熱心に取り組んでいた。

練習が終わり、まず「障害物リレー」が行われた。これは、「ミニハードルを跳ぶ→走る→ヴォーテックス投げ」（走順のよって「ヴォーテックス投げ→走る→ミニハードル」の順）で、トラックを4つに分けて一区間100mでリングバトンを繋ぐ方法で行われた。バトンの受け渡し地点には走り高跳びのマットを置き、減速してからバトンを渡したり、ヴォーテックス投げを行う時には、バトンを置いてから行うなど、安全面を配慮して行われた。また、トップアスリートもチームに入って、最終走者で実際にリレーを行った。子供達は楽しそうに一生涯懸命リレーを行った。

続いて4×100mリレーが行われた。こちらも同様にトップアスリートが最終走者に入り行われた。障害物リレーで1位にならなかったチームは、少しでも上の順位をとろうとみんな全力で頑張っていて、大きな盛り上がりを見せていた。最後にはチームの連帯感も生まれ、みんな楽しく終わることができた。リレー種目の特性が現れた形となった。

最後の閉会式では、トップアスリートから一言ずついただき、記念撮影をして終了した。今回は「子供達に技術指導する」というよりは、「子供達と一緒に陸上競技を楽しむ」ことに重点を置き行われ、子供達にも夢のような時間であったのではないかと感じられた。



第50回ジュニアオリンピック陸上競技大会報告

2019年10月11日（金）～13日（日）の3日間で開催予定であった、「第50回ジュニアオリンピック陸上競技大会」。今回は、場所を日産スタジアムから等々力陸上競技場へ移しての開催であった。

その中、大会開催1週間前より台風19号の接近・上陸の報道がなされ始めた。刻一刻と状況が変化していく中、13日の開催に際しての安全性が担保されない状態であったために、10月9日（水）に大会3日目の開催を止むことなく中止と判断した。また、公共交通機関における計画運休の報道も出始めたことから、10月10日（木）には大会2日目の中止も決定し、苦渋の決断ではあったが、10月11日（金）のみ開催とした。

当日は、B男女1500mの予選をタイムレース決勝とした以外は予定通り実施し、全12種目が行われている。

また今大会より、初めての試みとなる「チャレンジレー

ス」を実施したが（大会要項参照）、大きな混乱もなく実施ができた。

時折雨風が強い状況下ではあったものの、選手達は日ごろの練習の成果を発揮すべく、集中しレースへ挑んでいた。そのような中、A女子200mではハッサン・ナワール選手（千葉・松戸五中）が23秒99（+1.8）の日本中学新記録・大会記録で優勝。中学生としては初めてとなる、23秒台へ突入した。またABC女子共通ジャベリックスローでは、倉田紗優加選手（長野・南箕輪中）が、58m63の中学最高記録・大会記録をマークし優勝。とりわけ倉田紗優加選手は、昨年度のジュニアオリンピックの同種目でも優勝しており、2連覇を達成。1日のみの開催となったが、参加した選手が大いに大会を盛り上げてくれる結果となった。



大会観戦ガイド

いよいよ駅伝&マラソンシーズン到来！
MGCファイナルチャレンジに挑む選手たちにぜひご
注目下さい！

第73回福岡国際マラソン選手権大会 兼 マラソングランドチャンピオンシップ ファイナルチャレンジ～東京2020オリンピック 日本代表選手選考競技会～

男子マラソンのトップランナーが福岡に集結！
日本代表の座を巡って、白熱の戦いを展開します。日
本屈指の実力者たちが世界の強豪に挑みます。

▼日時：12月1日（日）12時10分スタート

▼会場（スタート・フィニッシュ）：

福岡・平和台陸上競技場

▼アクセス：

- ・福岡市地下鉄「大濠公園」、「赤坂」駅下車徒歩8分
- ・西鉄バス「大手門・平和台陸上競技場入口」バス
停下車徒歩5～8分

▼コース：福岡朝日国際マラソンコース（平和台陸上競
技場・大濠公園～福岡市西南部周回～香椎折
り返し）42.195km

▼参加標準記録：

[Aグループ]	フルマラソン	2時間27分以内
	30km ロードレース	1時間35分以内
	ハーフマラソン	1時間05分以内
[Bグループ]	フルマラソン	2時間35分以内
	30km ロードレース	1時間45分以内
	ハーフマラソン	1時間10分以内

▼テレビ放映予定：テレビ朝日系列

12月1日（日）12：00～（テレビ朝日系列など全国
29局ネット）

▼問合せ先：福岡国際マラソン選手権大会事務局

（朝日新聞社西部企画事業チーム内）

TEL：092-411-1137

▼日本陸連WEB内大会ページ

<https://www.jaaf.or.jp/competition/detail/1375/>
大会公式サイト

<http://www.fukuoka-marathon.com/info.html>

第5回さいたま国際マラソン 兼 マラソングランドチャンピオンシップ ファイナルチャレンジ～東京2020オリンピック 日本代表選手選考競技会～

今年で第5回目となるさいたま国際マラソンは、
IAAFシルバーレベルの大会であり、国内外の有力選手
が集います。

埼玉を舞台に繰り広げられる熱戦にご期待下さい。

▼日時：12月8日（日）9時40分スタート

▼会場（スタート・フィニッシュ）：

さいたまスーパーアリーナ

▼アクセス：JR京浜東北線・宇都宮線・高崎線「さい
たま新都心」駅下車、徒歩すぐ

▼コース：さいたまスーパーアリーナ発着、IAAF・日
本陸連公認コース）

▼問合せ先：さいたま国際マラソン大会事務局

048-832-2561（平日／10：00～18：00）



昨年度の大会より



昨年度の大会より

▼日本陸連WEB内大会ページ：

<https://www.jaaf.or.jp/competition/detail/1376/>

大会公式サイト：

<https://saitama-international-marathon.jp/>

“日清食品カップ”

第22回全国小学生

クロスカントリーリレー研修大会

全国から小学生の精鋭たちが大阪に集結！一生懸命走る金の卵たちに、大きなご声援をお願いします！

▼日時：12月7日（土）～8日（日）

▼会場：大阪・万博記念公園東の広場特設コース

▼アクセス：

- ・阪急線：南茨木駅、山田駅、蛍池駅
- ・地下鉄御堂筋線（北大阪急行線）：千里中央駅
- ・地下鉄谷町線：大日駅
- ・京阪本線：門真市駅

上記駅のそれぞれから大阪モノレール「万博記念公園駅」もしくは「公園東口駅」

▼種目：

- ・11：05 友好タイムトライアルレース（女子）
 - ・11：15 友好タイムトライアルレース（男子）
- チーム対抗リレーに参加できなかった50チームの男女各1名が出場。
- ・11：25 チーム対抗クロスカントリーリレー
- 全国から50チームが参加し、6区間（1区間1.5km）の総合タイムで順位を決定。
1・3・5区が女子選手、2・4・6区が男子選手。



昨年度の大会より（京都・桂中が男女そろって優勝）

▼出場チーム：各加盟団体より推薦を受けた全国47都道府県より各1チームずつ、開催地（大阪）より3チームの合計50チームが出場。

▼問合せ：

日本陸上競技連盟事務局 担当：古田・磯貝

TEL 050-1746-8410

▼日本陸連WEB内大会ページ：

<https://www.jaaf.or.jp/competition/detail/1377/>

令和元年度全国中学校体育大会

第27回全国中学校駅伝大会

▼日時：12月15日（日）

女子11時00分スタート

男子12時15分スタート

▼会場：滋賀県希望が丘文化公園 スポーツゾーン芝生ランド

▼アクセス：

- ・JR琵琶湖線野洲駅より 近江鉄道バス・希望が丘西ゲート経由「花緑公園行」または「村田製作所行」で約10分

▼種目：

- ・男子の部（6区間18km、各区間3km）
- ・女子の部（5区間12km、1・5区3km、2・3・4区2km）

▼問い合わせ先：

第27回全国中学校駅伝大会滋賀県実行委員会事務局

TEL 077-535-9080 / FAX 077-535-9081

▼日本陸連WEB内大会ページ：

<https://www.jaaf.or.jp/competition/detail/1378/>

大会公式サイト：

<http://www.zenkokuekiden-shiga.jp/>



昨年度の大会より



JAAF SAGA 一般財団法人佐賀陸上競技協会

〒840-0852 佐賀市中折町10-18 高橋正秀様方
TEL.0952-23-8961 FAX.0952-23-8961
http://www.sagarikujyo.jp/

10月4日～8日に、第74回国民体育大会が茨城で開催されました。佐賀県チームは苦戦を強いられましたが、3名の入賞者を出すことができました。成年女子1500mの陣内綾子選手が3位、少年男子共通5000m競歩の宮原空哉選手が5位、少年女子B100mの永石小雪選手が5位という成績でした。その他、今回惜しくも入賞は逃しましたが、入賞が十分に期待できる選手がいますので、本番での調整能力や競技力向上に向け、更なる強化を図っていきたくと考えています。

また、2023年に佐賀で開催される第78回国民スポーツ大会を見据え、今回、競技運営面の視察も行いました。大会会期中の多忙な折にもかかわらず、視察を受け入れていただき、数々のアドバイスをいただくことができました。茨城陸上競技協会関係者の皆様に、この場をお借りしまして深く感謝申し上げます。

なお、10月12日～14日に予定されていた全国障害者スポーツ大会についても、競技運営面などの視察を行うこととしていましたが、残念ながら台風19号の影響により中止となりました。大会関係者の皆様にとっても大変なご苦労があったこととお察ししますが、近年の異常気象の状況を見ていると、数十年に一度と言われるような災害は、決して想定外のことでなく、十分に想定をして大会運営に臨むべきことと痛感した次第です。そういった意味では、大会運営を行う行政機関とも十分に連携を持ち、施設整備を含めた環境整備にも気を配っていく必要があると考えています。

JAAF NAGASAKI 一般財団法人長崎陸上競技協会

〒854-0061 諫早市宇都町27-1
一般社団法人 長崎県公園緑地協会管理事務所分室内
TEL.0957-21-1921 FAX.0957-47-5411
http://jaaf-nagasaki.net

「めざせオリンピック」

選手の強化育成事業として平成22年度より「2014年長崎がんばらば国体の開催をきっかけに『しま事業』として開催されました。長崎県は離島が多くなかなか本土に来る機会が少なく、選手の強化育成は手薄になっていました。そこで離島の小中学生を中心に選手強化事業を行っています。現在は2020年に東京オリンピックが決まり、『しま事業』から『めざせオリンピック事業』へと名称を変更し毎年離島を中心に約130名の選手が諫早市等に集結し長崎出身のオリンピック選手や著名選手の講演、指導を受けています。



平成22年度より開催して今年で9年目を迎えます。初年度に小学生で参加していた子どもたちも今では大学生になり陸上を続け、オリンピックを目指している選手もいます。少しずつですが小学生・中学生を中心とした『めざせオリンピック事業』は選手の強化育成だけでなく、スポーツで長崎が盛り上がることで地域活性化にも繋がっています。

《めざせオリンピック事業》

2020年1月25日、26日 諫早市トランスコスモスタジアム 補助競技場にて実施予定

対象：小学5、6年生 中学1、2年生

参加者：本土・五島市・壱岐市・対馬市・新上五島町 選抜選手

JAAF KUMAMOTO 一般財団法人熊本陸上競技協会

〒861-8046 熊本市東区石原2-9-1 熊本県民総合運動公園内
TEL.096-388-1688 FAX.096-388-1688
http://www.kumariku.org/

各種の調査によれば陸上競技人気が上昇中である。男子短距離等の活躍もありうれしい現象である。熊本県では本年度より小学校部活動の社会体育移行がなされたため、各地で小学生を対象とした陸上クラブが立ち上がり、盛況になってきた。熊本陸協では年2回の小学生大会を行っているが、参加者も多い。パリ世界陸上200m銅メダリスト、リオオリンピック4×100mリレー銀メダリストの末續慎吾選手も参加経験がある。小学生で陸上競技の面白さを知り、他競技から移って来る子供も多い。陸上競技で培った能力を他競技で生かしている例も多く、他競技との連携も始まり(サッカー等)これからの動きとして期待できる。本県でも普及育成こそが競技人口の増加、競技力の向上において最重要の課題である。その解答となりそうなクラブの台頭に期待が集まる。

熊本は駅伝、マラソン人気が非常に高い。金栗四三氏が創設した熊田30kmはMGCで1・2位に入り東京オリンピック出場を内定した中村、服部選手を始めとしてマラソンへの登竜門として過去幾多の名選手を輩出し、その役割を果たし続けている。同時開催で今年8回目を迎えた熊本城マラソンも年々大盛況である。沿道の多くの応援が参加者の背中を押している。地元テレビ局2局が長時間の生中継で県民上げての盛り上げに一役買っている点も見逃せない。

フィニッシュ地点の熊本城二の丸広場間近に控える連続した急坂に「挑む」という発想をもって取り組むランナーの視点は新しい。我々も発想を柔らかく、大胆さを持って新しいニーズに対応しなければいけないようである。(文責：企画・広報部長 福海正隆)

JAAF OITA 一般財団人大分陸上競技協会

〒870-0931 大分市西浜1-1 大分市宮陸上競技場3階
TEL.097-552-7808 FAX.097-552-7806
http://www.d-b.ne.jp/oita-rik/

本年度は、役員改選でした。それに伴い大分陸上競技協会の運営方針を見直しました。以下にその運営方針をご紹介します。

ご承知のとおり、今日、社会情勢や日常生活の変化に伴いスポーツやそれを運営する組織の「在り方」が問われ出しました。そのためにもう従来どおりの既成概念では、運営組織が先細りし存続できない様相を呈しています。大分陸上競技協会も例外ではありません。

そこで大分陸協といたしましては、更なる大分県の陸上競技の充実・発展を図るために、

「魅力ある大分陸上競技協会」を到達目標に掲げ、「大分で陸上競技をする・観る・支える魅力の向上」を主軸に据えました。更にその中心課題を以下の四点としました。○競技力の向上を図る⇔トップアスリートの育成と裾野を広げる。○審判員の意義を深める⇔審判活動が認められることと審判員の発掘。○人づくりの一助とする⇔教育現場と社会生活。(競技の目的と手段)。○豊かで幸せな人生に繋げる⇔生きがいと健康生活。(生涯スポーツ)。

要約すると、もう一部の運動の得意な人のための「競技スポーツとしての陸上競技」の範囲ではなく、「競技をするに問わず、老若男女を問わず、誰でもそれぞれの立場で楽しむ陸上競技」と表現できます。大分陸協は、陸上競技の価値を実現していくために、県下600名近い会員と一致協力して「魅力ある大分陸上競技協会」を目指します。全国の皆様方の温かいご指導を宜しくお願い申し上げます。

(文責：理事長 稲津喜英)

陸協NEWS



JAAF
MIYAZAKI

一般財団法人宮崎陸上競技協会

〒880-0022 宮崎市大橋2-6-1 ヤヨイビル5階
TEL.0985-25-6011 FAX.0985-25-6011
http://www.miyariku.org/

今回の茨城国体では、昨年入賞した7名のうち名のうち6名が不在のため、今回の国体は苦戦が予想された。しかし、少年男子B100mがランキング外から5位に入るなどして、少年4種目(14点)、成年3種目(種目9点)、成年少年共通リレー(8点)の8種目が入賞し、競技別総合成績(天皇杯)において、24位となる41点(参加点10点含む)を獲得した。



最終種目では、予選より順調にラウンドを進めてきた成年少年共通男子4×100mリレー、が全体3番目の記録で32年ぶりに最終日の決勝に駒を進め、男子初優勝を成し遂げることができた。お世話になった多くの方々に感謝したい。

今回の結果を良い刺激にし、2020年鹿児島国体、そして2026年宮崎国民スポーツ大会に向けて、現在行っている各ブロックのクリニックなどの更なる充実と新たな強化策を模索しながら「チーム宮崎」心をひとつにして、今後とも頑張っていきたいと思う。

(文責:強化部長 稲垣徳文)

JAAF
OKINAWA

一般社団法人沖縄陸上競技協会

〒900-0026 沖縄県那覇市奥武山51-2
沖縄県体協スポーツ会館5階 506号
TEL.098-996-2881 FAX.098-996-2882
http://www.jaaf-okinawa.jp/

2019年8月にドーハで行われた世界陸上に、本県から初の日本代表が選出された。本協会のこれまでの強化の成果と今後の選手の目標にもなり歓喜と来年の東京オリンピックへ沖縄からの出場を目標に協会としてさらなる強化と支援に励んでいきたい。



10月のクリニックの様子

さて、島国である本県は、近隣までの交通移動を不便として大会や講習会等への参加を苦慮しているところだが、8月31日にU-13(小学生)指導者講習会と10月5日にU-13アスリートクリニックの二事業が開催された。8月の指導者講習会では、39名の指導者が参加。コーチングスキルの講義から始まり、小学校で取り組む基本的な指導方法を実技を通して指導していただいた。10月のクリニックでは、小学生52名が参加をし、発育発達についての講義、走・跳・投の基本運動、保護者向けの栄養講習、最後には実技講習で混成競技での記録会を実施した。半数は、陸上競技初心者の子供が多く、始めは戸惑う様子も見られたが、実技の時間を重ねることに動きがよくなり、記録を大幅に更新して喜んでいる表情が印象的であった。今後は、この指導を各小学校各クラブに持ち帰り、普及と強化へ繋げられるよう協会としても支援を続けていく次第である。

(文責:総務副部長 高島友幸)

JAAF
KAGOSHIMA

一般財団法人鹿児島陸上競技協会

〒890-0062 鹿児島市与次郎2-2-2 鴨池陸上競技場内
TEL.090-9562-2080 FAX.099-254-9156
http://www3.synapse.ne.jp/karikupage/

来年開催されます「燃ゆる感動 かがしま国体」に向けてのリハール大会(第37回全九州高等学校新人陸上競技大会)が10月11日(金)～13日(日)に白波スタジアムで行われました。大会中はTICやミックスゾーンといった普段の大会では設定されない部署において対応に苦慮したり、新しい機器の操作にまだ慣れないなど、いくつかのトラブルが発生しました。これらの反省を踏まえ審判部を中心に来年の本番までには改善できるようにしたいと考えています。

また、先日開催された茨城国体においては、入賞数が少年5、成年3、合計45.5点という結果でした。入賞期待の選手の失格や取りこぼしもいくつかあった中で最低限の目標達成はできたかと感じています。その中でも少年男子5000m競歩で優勝した向井大賀選手(鹿児島商業高校)は、本人の努力と指導者の熱意が結実したものと評価されるものであり、この勢いを来年につなげて行きたいと思います。

鹿児島国体までには、会場や器具の充実、審判技術の向上、選手の強化といった課題は山積みですが、運営と強化の両面で鹿児島陸上競技協会が一丸となって取り組んでいきたいと考えています。

(文責:競技部長 麻生貴宣)

事務局からのお知らせ

◆◆2020年5月!「セイコーゴールデングランプリ陸上2020東京」開催決定!!◆◆

2020年に開催するゴールデングランプリ陸上の開催日程・会場が決定しました。

本大会を第1回(2011年)からご支援を頂いているセイコーホールディングス株式会社が2020年大会も特別協賛及びオフィシャルタイマーとして決定し、今大会が第10回大会となります。

【セイコーゴールデングランプリ陸上2020東京】

- 開催日程: 2020年5月10日(日)
- 開催会場: 国立競技場(〒160-0013 東京都新宿区霞ヶ丘町10-1)
- 主催: 公益財団法人日本陸上競技連盟
- 特別協賛: セイコーホールディングス株式会社
- 主管: 公益財団法人東京陸上競技協会



前回大会より。来年は東京での開催に

◆◆日本選手権リレー&北九州陸上カーニバル・ジュニアオリンピック・高畠競歩大会の動画を公開中!◆◆

10月11日(金)に、神奈川・等々力陸上競技場で開催された第50回ジュニアオリンピック陸上競技大会、10月26日(土)と27日(日)の2日間で開催された第103回日本陸上競技選手権リレー競技大会&GPシリーズ最終戦!第41回北九州陸上カーニバル、第58回全日本50km競歩高畠大会の動画を公開中です。

激戦の様様をもう一度、お楽しみ下さい。

▼アクセスはこちらから!

ジュニアオリンピック公式サイト
(<https://www.jaaf.or.jp/jro/50/?ls=%2Ftop>)

日本選手権リレー&北九州陸上カーニバル
(<http://www.jaaf.or.jp/competition/detail/1390/>)

全日本50km競歩高畠大会
(<https://www.jaaf.or.jp/competition/detail/1391/>)



陸連時報編集委員

◇編集委員

- 横川 浩(陸連会長)
- 友永 義治(陸連副会長)
- 八木 雅夫(陸連副会長)
- 尾縣 貢(陸連専務理事)
- 麻場 一徳(陸連強化委員長)
- 風間 明(陸連事務局長)
- 牧野 豊(陸上競技マガジン編集長)

◇時報編集室責任者

- 大嶋 康弘
- ◇時報編集担当
- 繁田 進
- 石塚 浩
- 木越 清信
- 宮田 宏
- 廣瀬 静香

陸連時報編集室

〒160-0013
東京都新宿区霞ヶ丘町4-2
JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE 9階
日本陸上競技連盟内
TEL: 050-1746-8410
FAX: 050-3588-1869